＊子ども防災博士意見発表の部＊

最優秀賞「災害を正しく恐れよう」

岩出小学校　田中　隼虎さん

『ドンッ』

屋根に何かがあたる音が、家中に響きわたりました。

「なんや、今の音！」

「隼虎、どないしよう。こわい！」

幼い弟が泣き続け、玄関からはジワジワと雨水が入ってきます。降り続ける大雨はまったく止む気配がなく、吹き続ける暴風はドアを壊しそうな勢いでドンドンと叩いています。ふっと電気が消え、真っ暗となった部屋の中で、今まで経験した事のない恐怖が僕を襲いました。

「あかん。この台風は、今までのヤツとはちゃう。ほんまにやばい！」

弟たちと震えながら「早く過ぎてくれ」と心の中で祈り続けました。

どれくらいたったでしょう。雨と風がおさまり、周りの様子を見ようと外へ出た僕たち家族は、そこで、目を疑うような光景を目の当たりにしました。電柱の電線は切れて垂れ下がり、家の瓦は飛ばされ、穴が空いています。周りには、風で飛ばされて来たのか、何かの部品や小石が散乱しています。

「大変なことになったなぁ」

そんな事を考えながらぼんやりと立っていた僕は、ふり返ってゾッとしました。いつもの見慣れた僕の隣の家。その家の窓に、一（いち）メートルを超える長さの鉄の棒が突き刺さっていたのです。

これは、今から四年前、平成三十年に僕が実際に体験した出来事です。この時、和歌山を襲った台風は第二十一号。近畿地方を中心に大きな被害を出した『非常に強い』台風でした。僕は今回、学校の活動で『災害』に関する学習をする中で、『台風』について詳しく調べることにしました。地震や津波、洪水や竜巻など、その他の自然災害にも興味はあったのですが、僕にとって一番身近で恐ろしいと感じた『自然災害』が台風であったことに加え、僕自身の体験を通して、みんなにあらためて『台風』の恐ろしさについて考えてもらいたいと思ったから

です。僕の意見が、みなさんに伝わることで、何か一つでも危険が遠ざかればいいと思います。

僕が伝えたい台風の恐ろしさ、その一つ目は、「暴風」です。台風は大雨だけでなく暴風も伴います。小石やゴミなど、小さくて軽いものだけでなく、瓦などの大きくて重い物も飛ばされてしまうことがあります。僕が体験した時のように、鉄の棒など鋭くとがった物が飛んでくれば、窓は簡単に割れてしまいます。備えがあれば、雨戸やシャッターを下ろし、もしなければテープやフィルムをはるとよいそうです。カーテンを閉めるだけでもガラスが飛び散るのをある程度おさえることができます。割れることを防ぐだけでなく被害を危険を減らす努力も必要だと学習して感じました。

台風の恐ろしさ、その二つ目は、「停電」です。四年前の台風では電線が切れ、僕の家は周りも含め、真っ暗になりました。お風呂にも入れず、テレビもつきませんでした。一番辛かったのは、家のコンロが IH だったため、調理をすることができず、冷蔵庫の中にあった物しか食べ物がなかったことです。普段当たり前のように使っている電化製品が使えなくなる。そんな場合への備えも必要ではないでしょうか。僕の家では、その後、水と非常食の量を増やしました。また、カセットコンロを購入し電気が使えなくなった時も調理ができるよう、備えるようになりました。

台風の恐ろしさ、三つ目は、「台風に対しての慣れ」です。実はこの三つ目が、僕自身みなさんに一番伝えたいことなのです。台風という自然災害は、ほぼ毎年、日本にやってきます。みなさんは、こんな会話をしたことはありませんか。

「今度台風来るらしいで。」

「マジで。やったぁ。警報になって学校休みになったらええなぁ。」

毎年やってくるいつもの災害。注意報や警報が出ても思っていたより激しくはない。そんな事が数回続くと、人は台風に慣れ、「次も大したことない。」という油断を心の中に生み出します。正直に言って、僕自身がそうでした。四年前の台風に襲われる前までは。ですが、自然災害である以上、常に万が一に備えておく必要があるのではないでしょうか。

命の危険があるという点では、百年に一度の大地震も、毎年やってくる台風も違いはありません。大切なのは、「その時」を意識した生活の備えと気持ちの備えであると思います。災害に慣れていくのではなく、災害を正しく恐れ、理解す

る。その一歩一歩が自分の命と未来を守ることにつながるのだと僕は思います。